

まんだら通信

平成19年(2007)06月 佛誕2573年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍涉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>
E-mail ryusho@awa.or.jp



子を育てぬ母親に

篠原 鋭一

「赤ちゃんポスト」のことが話題になっている。どうしても育てることができないとの理由は母親各々にあるにちがいない。けれど確かに自分の生命とつながっている。わが子々を赤ちゃんポストに預けて無言のまま立ち去る姿を想像すると、なんともやりきれない気持ちになり、とても他人事と割り切れない。

事実、他人事ではなくなった……。深夜。タクシードライバーから道に迷っているとの電話が入った。乗客は誰かと問うが、「とにかく長寿院に行ってくれ」と告げるばかりの女性だという。道を教える。三歳と八カ月になる男子二児の母親M子さん(三十二歳)がうつろな眼でポツリポツリと語り始めた。「去年の十一月、主人が心臓発作で突然死しました。私、淋しい……。すぐにでも主人のところへ行きたいんです」

思わず問いかける。

「二人のお子さんはどうするの?」「上の子はもう両親に預けています。下の子は……」M子さんの沈黙が続いた。次の言葉をじつと待つ。M子さんが口を開いた。「……赤ちゃんポストが開設されたら、お願いしようと思っています」「え?赤ちゃんポストへ?」彼女は号泣しながら訴える。「このままだと、私、子供を殺してしまいます。お風呂に入れた時、何度も湯船の中に沈めて殺そうとしたんです。でも死ななかつた。子供が可愛くなれないんです。だから赤ちゃんポストへ入れてきたいんです。住職さん、殺すつもりだと思いませんか。主人のところへ行くにはこれしかないんです。主人のところへ行ければいいんです。ワーツ!」M子さんの号泣は続く。

ふと、学生の頃からの友人で社会福祉法人養護施設「野の花の家」園長、花崎みさをさんのことが頭に浮かんだ。教えて欲しい、との思いで、早朝の無礼を省みることなく電話をかける。

「篠原さん、ある日ね、一人の若い母親が三歳の子供を抱いてやって来たの。彼女、私の顔を見るなり「この子、育てられないので先生にあげる」って言うのよ。なぜって聞くと涙を流しながら「自分は母親に愛されて育つてなかったのよ、私もこの子を受養することできない!こんな私に育てられるよ、この家で育ててもらった方がいい。この子、先生にあげる。」と言うの。」

彼女の母親は、自分流に子供を可愛がり、それで子供は満たされていると思いついていたようだけれど、子供である彼女は自分が求める時、母親にはいつも拒否され、母親のままに動かざるを得なかった自分のことを、母親は自分を愛してくれていなかったと思いついて、その思い込み支配されていく、わが子をしつかりと胸に抱きとめられないのよ。かわい、という情動のままに子供を思いきり愛撫することができない親になっ

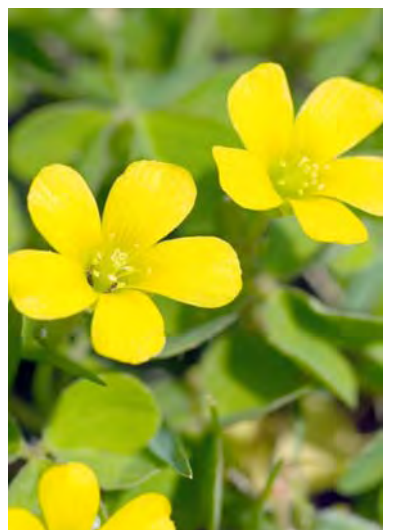
ていたのね。つまり、愛着関係をつけられないまま育つた子供が親になった時、同じことがおこるのね」「花崎さん、その母親とお子さんはその後どうしました?」「三歳児はとりあえずショートステイで預かった。お母さんはね、母親に支配されていたという思いがトラウマとなって子供を愛せないのだから、専門医にお願いして治療をしているところ……」

私思うの。家族が小単位化していくと共に孤立化傾向が強まり、子育てのノウハウもないまま自分流の子育てに疲弊している若いお母さんにとっては「自分を助けて、」もつと自分の面倒も見て欲しい」というのが本音かもしれないわ。M子さんも主人の突然の死でまいっちゃってるのよ。聞いてくれる人がいない、わかってくれない、人がいない。それなら主人のところへ行くこと、わかつてあげて。お役に立つことがあつたらいつでも……」夜が明けた。窓を開けると初夏の風が部屋に空気を入れかえてくれる。M子さんに花崎さんのことを話した。

「野の花の家を訪ねてみませんか。花崎さんはねえ、たくさんの外国の女性たちをも救ってきた人です。まさに野の花の中で微笑む佛さまのような方です。きつと力になつてくださいますよ。」M子さんが顔を上げてうなずいた。「私、おたずねします」「そうするといい。一つお願いがあります。お子さんをお風呂で沈めることは絶対にやめてください!それと、お子さんを立派に育てあげることがご主人と会えることにつながるのです。お子さんを残して逝つてはなりません!」花崎園長がいてくださつてよかったと心底思った。

赤ちゃんとお母さんの部屋はすぐそばにあったのだ。そこには野の花がいっぱい咲いているにちがいない。(つづく)

月刊誌『寺門興隆』からの転載です。篠原鋭一さんは成田市の曹洞宗長寿院ご住職。お寺を開放して地域のために活動中とのことです。ご本も多数出版。また『野の花の家』は、木更津市真里谷にあります。園長さんは花崎みさおさん。福祉にかかわっている人にはお馴染みですね。



07.06.08 龍涉

◆梅雨入り前のひと時。晴れた空にさわやかな風が吹いています。

見かけた方がいると思いますが、エンジン付きのパラグライダーで空の散歩を楽しんでいる、館山の中村さんが写して『房州わんだらんど』に載せた写真の一コマです。

本郷区の一部で、画面の一番上、山のふもとに紫雲寺が見えています。

一際鮮やかな山の青葉は、『トウジイ』(マテバシイ)です。

育ちが早く堅木のため、薪や木炭用に植えたものですが、誰も山に入らなくなって里山が見捨てられて育つに任せています。日が差し込まないため下草が育たず、野草を撮りたい私などに

は困ったことですが、一年一度、輝くような若葉は無条件に美しいと思います。◆10日ほど前の夕方、山門の辺りで時ならぬエンジンの音。何かかと思つたらミツバチの大群でした。

ブログに書いたところ、詳しい方が見に来て「これはニホンミツバチという、日本固有の種類でおとなしいですよ。」といてくれました。

その後、鬼がわらの隙間に住み着いて、忙しく働いています。

◆去年子育てに失敗したツバメの夫婦が、3日ほど前に帰ってきました。

古いきれいな巣があるのに、何故か隣に新しく作っています。

こちらも夜明けから日暮れまで、せせと土を運んでいます。

◆既にお知らせした通り、7月7日6時半は『あそか基金』チャリティ・コンサート、『ジャズライブのタベ』です。アフリカの民族楽器バラホンと、カリブ海のスチールドラムにピアノとベース、それにお馴染みのフルートの深津純子さんが賛助出演して下さることになりました。

心に残るライブになることでしょう。チケットもでき上がっていますので、お早めにお申し込みください。

◆今月の野草はカタバミ【かたばみ科カタバミ属】。庭や道端の日当たりのよい場所に生えますね。

見慣れた草ですが、鮮やかな黄色が捨てがたいと思います。

余滴